阼陵

No.14

関西大学考古学等資料室彙報

昭和61年11月1日発行

考古学等資料室（簡文館内）

目 次

『北堂書鈔』に見える中国漢三国六朝時代刀剣の銘文……2

インド古代仏教寺院跡の発掘—伝祇園精舎の調査—……7

考古学等資料室概要……10

資料室ニュース……12

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35（06—388—1121）

『北堂書鈔』に見える
中国漢三国六朝時代刀剣の銘文

横　田　健　一

昭和53年に埼玉県の稲荷山古墳から銘文のある鉄剣が発見された。奈良県立橿原考古学研究所では、刀剣銘文研究会が発足し、その研究にあたることになり、私も日本と中国の銘文の比較というテーマを担当したが、その調査報告を出していない。この小文はその報告の一部である。

『北堂書鈔』160巻は、初唐の名臣虞世南が、隋の秘書郎であった時に編纂した類書である。帝王后妃、官職、礼法、器物、天地歳時、自然など萬般について、多くの古典を引用し、故事、伝承、名句等をしるしたものである。その巻122、123、武功部10、11にしるされた剣、刀などの銘文を、ここにかかげ、和訳し、註をつける。校異は概ね省略した。

(1)　先王觀變

傅玄剣銘序云。道徳不修雖有千金之剣、何所用之先王觀變而服剣所以立武象也太上有象而已其次則親用之矣。

訓読

傅玄の剣の銘の序に云く。道徳修まらずんば、千金の剣有りと雖も、何の用ふる所ぞ。先王は変を觀て剣を服ぶ。武の象を立つるゆえんなり。太上は象あるのみなり。其の次は則ち親しくこれを用ふ。

註

〔傅玄〕晋の人。幹の子、字は休奕、博学でよく文を作り音律を解す。郎中をへて弘農の太守、魏の武帝の時司隷校尉となる。顕貴となっても著述を廃せず。傳子数十万言を著し、楽府歌章を作る。62歳で卒す。〔太上〕大上に同じ。至上・極上のもの。また太古、三皇五帝の世〔先王〕古の立派な天子。聖王。

(2)　縉紳咸服

李尤寶剣銘云、縉紳咸服翼宣儀刑以雄帯左以雌帯右

訓読

李尤の宝剣の銘に云く。縉紳みな帯ぶ。つつしんで儀刑を宣し、雄を以て左に帯し、雌を以て右に帯す。

註

〔李尤〕後漢、広漢県の人。字は伯仁。若い時から文章を以て称せられ、司馬相如、楊雄の風ありといわれた。蘭臺令史を至て、安帝の時、諫議大夫、順帝の時に楽安相となる。漢記を撰せしめられる。著に詩賦銘誄等28篇あり。

〔翼〕つつしむ、敬、いただく、奉。〔儀刑〕儀も刑も法。〔縉紳〕笏を大帯に挿む人。貴族、公卿。〔以雄帯左之云〕雌雄二剣のうち、雄剣を左の腰、雌剣を右腰におびること。

(3)　光文曜武

傳玄剣銘云、光文曜武以衛乃國。

訓読

傳玄の剣の銘に云く、文を光かし、武を曜かし、以て乃んぢの国を衛る。

註

〔乃〕汝に同じ。

(4)　體文經武

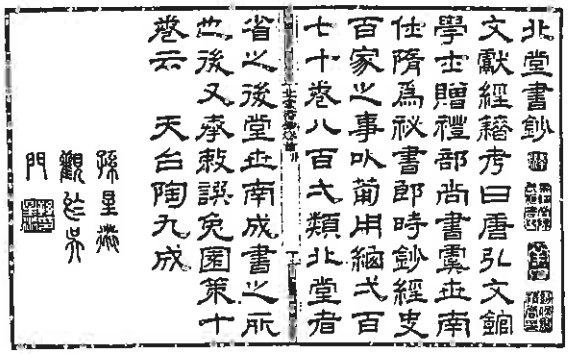
張協文身剣銘云、器以利顕實以名擧長剣耿介體文經武

訓読

張協の文身剣の銘に云く。器（剣を指す）は利を以て顕われ、実は名を以て（世に）挙がる。長剣は耿介にして、文を體し武を經す。

註

〔張協〕晋の人、載の弟、字は景陽。兄と名を


北堂書鈔序
文獻經籍考曰唐弘文館
學士贈禮部尚書虞世南
仕隋爲祕書郎時鈔經史
百家之事以備用編弍百
七十卷八百弍類北堂書
鈔後又奉敕誤免園策十
卷云　天台陶九成
孫星衍
觀於朱
門

北堂書鈔序（中華民国60年縮冊版より）

ひとしくす。官は河間内史。天下が乱れ盗が所在に起るに及び、草沢の間にかくれ、詠詩を事とした。永嘉の初、黄門侍郎に召されたが就かず。〔耿介〕かたく志をまもること。介は世俗に合わぬこと。〔體文經武〕剣の身に文（文様かざり）があることと、文章を作ることを兼ねていう。經武は、武事を經緯する、武事を張ること。

(5)　爲威儀

李尤駭具錯劍銘云。寶劍在躬實爲威儀。

訓読

李尤の駭具の錯の剣の銘に云く。寶剣躬に在れば、實に威儀を爲す。

註

〔駭具の錯の剣〕眼をおどろかすような錯（黄金のめっき）で飾られた装飾のある剣。〔為威儀〕威儀を張る。

(6)　帶以自禦偃以衛軀

崔駰刀劍銘云。龍泉太阿干將莫耶帶以自禦偃以衛軀實不可露韜藏忽諸抑欲奮怒含情是除念怨增怒災禍所居

訓読

崔駰の刀剣の銘に云く、龍泉・太阿、干將・莫耶は帶びて以て自ら禦ぎ、偃して以て軀を衛る。韜藏を露わすべからず。忽諸にも、奮怒を抑え、情を含み、是を除け。怨を含み，怒を増すは、災禍の居る所なり。

註

〔崔駰〕後漢、安平の人。篆の孫。字は亭伯。わかくして大学に遊ぶ。博学多才。班固、傅毅と名をひとしうす。官は元和中に竇憲の車騎將軍となる。著に詩賦銘頌21篇がある。〔龍泉〕宝剣の名もと龍渕といったが、唐代に高祖の諱が龍渕といったので、避けて龍泉という。豫章豊城県に夜光の起るをみて、西晉の人張華が赴き、光の起るところの獄の基を掘ること四丈余で石函を得た。中に双剣あり、並びに刻題を有し、1つを竜渕（泉）、1つを太阿とあった。〔太平寰宇記〕に竜泉県の南5里に良い水があり、剣を淬（すする、剣を鍛える時に熱してから水に浸すこと）のに適するという。〔干將莫耶〕戦国時代の呉にいた刀鍛冶の名工の名で夫を干將、妻を莫耶といい、呉王闔閭のために協力して一対の剣を作った。雄剣を干將、雌剣を莫耶という。呉ではなく楚の人、また韓の人という説もある。〔韜藏〕本心を包みかくすこと。〔忽諸〕かりそめに。〔偃〕伏し、横たわること。つつしみ隠忍することをいう。大意は、この銘は全体として名剣を帯び、身を守るべきであるが、慎しんで本心をあからさまにあらわさず、かりそめにも怒や怨を抱いてはならぬと訓戒しているのである。

(7)　九功欺像七德是輔

張協文身銘云　陸斷玄犀水截輕羽九功是像七德是輔

訓読

張協の文身剣の銘に云く。陸には玄犀を斷ち、水には輕羽を截る。九功を是に像わし、七德を是れ輔く。

大意

剣の鋭利なことは、陸上では皮の厚く丈夫な黒色の犀を斬り断つほどで、水に浮かぶ輕い羽を截断するほどである。この剣は持主をして九（多いの意）つの功を立てあらわさせ、また持主の七（多いの意）つの徳をたすける。

(8)　給左右

士孫瑞劍銘表日、臣有劍一枚駿犀標首藍田玉琢乞以備之信給用左右也

訓読

士孫瑞の剣の銘の表に日く、臣に剣一枚有り。駿犀にして、首に藍田の玉琢を標す。乞う以て、これを備えよ。信に左右に用を給せん。

註

〔駿犀〕駿はすぐれたの意。犀は、するどくよく切れるの意。〔藍田〕陝西省藍田県の東南にある山、一名覆車山、驪山の南の阜で、美玉を産す。玉山ともいう。〔劍表〕〔標首〕剣首の表の首（先）の方に琢いた玉の文様を刻みこんであったものか。〔士孫瑞〕後漢扶風の人。字は君榮。才謀があり、獻帝の初、執金吾となり、ついで王允の推輓によって僕射となる。董卓（叛臣）

を誅するに与ったが、功を允に帰して侯とならず、そのために李催の難を免れるを得た。後、国三老、光禄大夫となり、乱兵に殺された。〔後漢書96〕

大意

臣に一ふりの剣があります。鋭くよく切れ、剣身の先に美玉の文様があります。これをお手許にお備え下さい。まことに、いつも、お役にたつでしょう。

(9)　徳行則興

大戴礼云。剣之銘云、動必行徳徳行則興倍徳則崩

訓読

大戴礼に云く、剣の銘に云く、動かば必ず徳を行ひ、徳行はるれば則ち興る。徳に倍むかば則ち崩る。

註

〔大戴礼〕書名。前漢の戴徳撰。漢が興ってから魯の高堂生が「士礼十七篇」を伝えた。後、宣帝の時に至り、后蒼は礼に明通して、これを梁の人、戴徳と、その従兄の子、戴聖、及び沛の人、慶晋に伝授した。礼に大戴、小戴、慶氏の三家の学が起り、戴徳の学が大戴礼で、戴聖の小戴礼が今の『礼記』である。〔倍〕は、そむく、背反の意である。

大意は、のべるまでもない。

(10)　麟角鳳體

崔駰刀剣銘云、天地空位列后有珍鑄鎔成鍔陶冶成金麟角鳳體乃有文武

訓読

崔駰の刀剣の銘に云く、天地位を空しくすれば、列后に珍有り。鑄鎔して鍔を成し、陶冶して金を成す。麟角鳳體にして、乃ち文武有り。

註

〔天地空位、列后有珍〕天地には用いずに空けてある場所や物があると、諸王侯（后は王侯）に珍しい宝物がある。〔鋳鎔成鍔〕刀剣の鍔は鋳型に金属を鎔かし入れてつくる。〔陶冶成金〕刀剣身は鉄を鍛えて造る。〔麟角鳳體〕すぐれた刀剣は麒麟の角のようにすぐれた兵器で、鳳凰のように立派な姿をもつ。〔乃有文武〕立派な名剣を持つと文武にもすぐれることができる。

(11)　如玉斯曜　如影在水

張協太阿銘云、如玉斯曜若影在水不運自肅率土從軌

訓読

張協の太阿の銘に云く、玉の如く斯く曜き、影の若く水に在り。運らさずして自ら肅しむ。率土軌に從う。

大意

名剣太阿は玉のようにかがやき、水にうつる影のように澄み光っている。その剣をふるわなくても肅然として国中が法に従う。

(12)　水截鯨鯢

李尤寶剣銘云、龍渕曜奇太阿飛名陸斷犀兕水截鯨鯢善擊之妙齊契更贏縉紳咸服翼宣儀刑豈徒振武義合金聲

訓読

李尤の宝剣の銘に云く、龍渕は奇を曜かし、太阿は名を飛ばす。陸には犀兕を断ち、水には鯨鯢を截る。善く撃つの妙は、齊しく契ひ更に贏まる。縉紳咸服し、翼しんで儀刑を宣す。豈徒らに武を振はん。義は金聲に合なふ。

註

〔犀兕〕犀は雄、兕は雌。〔鯨鯢〕鯨は雄、鯢は雌。

大意

雄の名剣竜渕は、奇しさをかがやかし、雌の名剣太阿は世に名声を飛ばしている。その鋭利さは陸には雌雄の犀を切り断ち、水では雌雄の鯨をきるほどである。善く撃つことができる点では、雌雄の剣はひとしく合い、さらに、それにあまるほどである。貴族公卿はみな名剣を帯び、つつしんで法を宣する。あに徒らに武（剣）をふるうようなことをしようか。義しい道は剣の金の声（音）に叶っている。

(13)　太阿・竜渕

李尤寶剣銘云、五行並用誰能去兵龍渕曜奇太阿飛名。

訓読

李尤の宝剣の銘に云く、五行並びに用ふれば、誰か能く兵を去らん。龍渕は奇を曜やかし、太阿は名を飛ばす。

註

〔五行〕万物を生ずる五大元素である水火木金土。転じて仁義礼智信の五徳。

大意

仁義礼智信の五徳を並びに用いると、誰もが兵器武事を棄て去ることはない。

(14) 世載其美

張協太阿剣銘云、太阿之剣世載其美

訓読

張協の太阿剣の名に云く。太阿之剣は、世、その美を載さぬ。

註

〔載〕かさねる（奕世載徳のごとき）おこなふ（行）やすんずる（安）あたえる（予）なす（爲）

(15) 利用衛身以威弗治

魏文帝百辟寶剣銘云。於鑠良刀胡練亶時利用衛身以威弗治

訓読

魏の文帝の百辟宝剣の銘に云く、良刀を鑠するに於いて、胡ぞ亶時に練るや、利を用て身を衛り、威を以て、弗さめ治む。

註

〔魏文帝〕曹丕、三国志で有名な魏の曹操、武帝の長子、文学を好み、博聞強識「典論」詩賦100余篇を著作す。〔百辟〕諸侯、諸大名。〔鑠〕金属をとかすこと。ここでは良刀を鍛えること。〔胡〕なんぞ、なんすれぞ。〔亶〕まこと（信）、おほいなり（大）。〔弗〕治める意。

大意

良刀を鉄をとかして鍛えるにあたり、どうして大いなる時（適当な時節）に練るのか（剣は5月5日に造るのが適当とされていた）。その刀を利用して身をまもり、刀の威を以て弗さめ、治めるためである。

北堂書鈔卷第一百二十二　武功部十
隋秘書郎虞世南撰
南海孔廣陶校註
劍三十四
北堂書鈔卷一百二十二

北堂書鈔（中華民国60年繪冊版より）

(16) 用戒不虞

馮敬通刀陽銘云、修爾甲兵用戒不虞見危受命臨事而懼

訓読

馮敬通の刀の陽銘に云く、修爾たる甲兵は用て不虞を戒しむ。危を見て命を受け、事に臨みて懼る。

註

〔不虞〕思いがけぬ出来ごと。〔修爾〕ととのっているさま。

大意

きちんとととのっている鎧や兜と兵器は、それを用いて、思いがけぬできごとに備え、危い難に際しては天命を受け、変事にのぞんでは心につつしみおそれる。

(17) 將戒其身

李尤錯佩刀銘云、佩之有錯抑武揚文豈爲麗好將戒其身

訓読

李尤の錯せる佩刀の銘に云く、これを佩くに錯あり、武を抑え文を揚ぐ。豈麗好をなさんや。將て其の身を戒む。

大意

李尤の錯せる佩刀の銘に云く、これを佩くに錯あり、武を抑え文を揚ぐ。豈麗好をなさんや。將て其の身を戒む。

大意

その刀を佩くと黄金造りである。その刀をもって武を抑え、文名を揚げるのだ。どうして刀の麗しさを好もうか。もって己の身の戒としているのだ。

(18) 五色充鑪巨橐自鼓

典論云、余好擊劍至於百辟始成其成也五色充鑪巨橐自鼓靈物髣髴飛鳥翔舞以爲寶器九、劍三、一曰飛景、二曰流柔、三曰華鋒、三刀一曰靈寶、二曰含章、三曰素質、三七首、一曰青剛、二曰揚文、三曰龍鱗又造百辟露陌刀名日龍鱗因姿定名以銘其柎工非歐冶子金昆吾亦一時之良也

訓読

典論に曰く、余（魏文帝）擊劍を好み、百辟に至りて、始めて其の成を成す。五色鑪に充ち、巨橐自から鼓す。靈物髣髴として飛鳥翔舞す。以て宝器九をつくる。劍は三にして、一を飛景といい、二を流柔といい、三を華鋒という。三つの刀の一を靈宝といい、二を含章といい、三を素質という。三つの七首の一を青剛といい、二を揚文といい、三を龍鱗という。又百辟露陌刀を造る。名を龍鱗という。姿に因って名を定め、以て銘す。其の柎工は歐冶子金吾に非ず、吾も亦一時の良（工）なり。

註

橐はふいごう。

(19) 金馬形

李尤金馬書刀銘云、巧冶鍊剛金馬託形

訓読

李尤の金馬書の刀の銘に曰く、巧みに冶して剛を練る。金馬を形に託す。

大意

刀に飾として金製の馬を柄につけたものか、あるいは刀身に馬形をほりこみ金を嵌したか。

(20) 繁文波廻流光電照

張協文身刀銘云、寶刀既成窮理盡妙繁文波廻流光電照

訓読

張協の文身刀の銘に云く。宝刀すでに成り、理を窮め、妙を尽す。繁き文は波のごとく廻り、流光は電のごとく照る。

(21) 應速用近

張載匕首銘云、先民造制戒預唯謹匕首之制應速用近

訓読

張載の匕首の銘に云く。先民制を造り、預じめ唯謹しまんことを戒しむ。匕首の制はまさに速やかに近きに用ふべし。

(22) 素刃霜勵

張協長鋏銘云　素刃霜勵溢景横飛

訓読

張協の長き鋏の銘に云く、素刃は霜のごとく勵く、溢景は横さまに飛ぶ。

註

〔鋏〕は、はさみの他に劍をも意味する。〔勵〕は、はげしいの意。〔景〕は、光の意。

(23) 清輝載爛

又短鋏銘云、亦有短鋏清輝載爛首在先朝輯兵静亂

訓読

又短鋏の銘に云く、亦短鋏有り、清く輝き、爛を載す。はじめ先朝にありて、兵をあつめ乱を静む。

註

〔載爛〕載には満る、また満たすの意味がある。かがやきを満たす。〔首在先朝〕はじめ先きの王朝にあって。

おことわり

戟以下の兵器の銘文は省略した。また銘文の歴史的意義、解釈、考察などは、別の機会にゆずる。

インド古代仏教寺院跡の発掘

—伝祇園精舎の調査—

網　干　善　教

（I）

わが国に仏教が伝来して以後、仏教が日本人の精神的基盤となり、日本文化はそれを基調として形成されたものが多いといっても過言ではない。

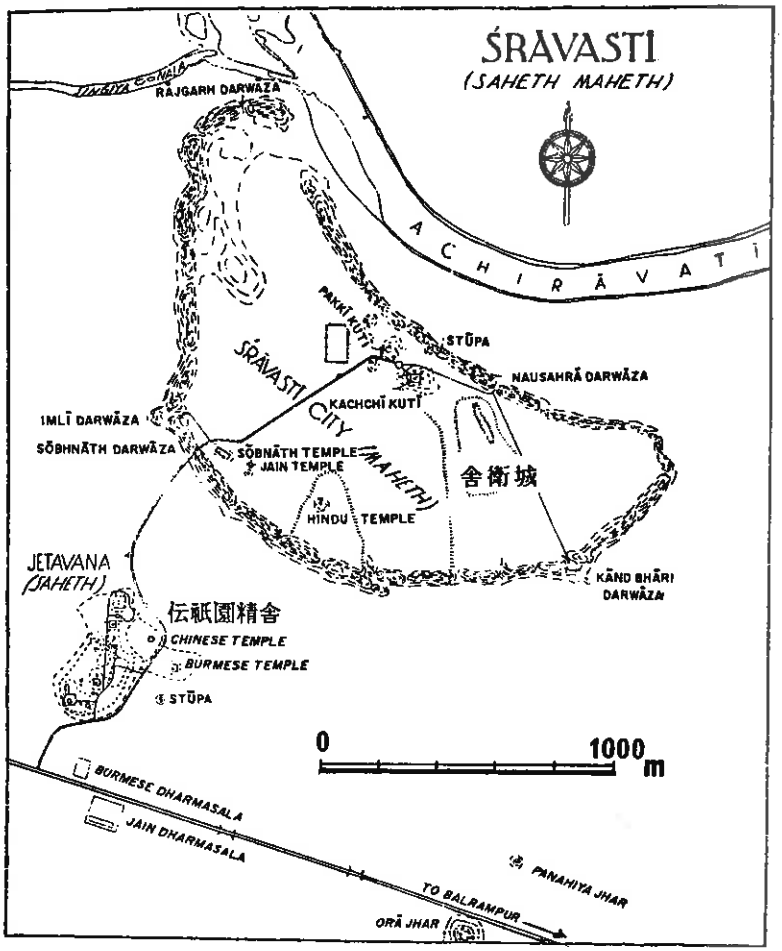
いうまでもなく、日本仏教は当初百済を通じてもたらされたものであるが、飛鳥時代すでに新羅仏教や直接中国大陸から影響のあったことも事実である。

仏教は BC 5～6 世紀頃インドに起った宗教で、やがて中国に流伝し、直接、間接にわが国に伝播した。故に仏教の原点はインドにあり、インドにおける古代仏教寺院の考古学的調査の意義を認め、実現への計画、交渉をすすめてきた。

（II）

昭和61年11月、関西大学は創立100周年という意義ある年を迎える。この記念すべき時にあたり、記念事業の一つとしてインド古代仏教寺院の発掘調査が実現できるよう数年前からインド国政府機関と協議をすすめてきた。インド国の機関としては、イギリスの植民地であった時代からインド亜大陸における数々の発掘調査に多大な成果を挙げてきたインド考古調査局（Archaeological Survey of India＝A.S.I.）で、現在の長官（Director General）は Dr. N.S. Rao、調査局長（Director of Publishment）は Dr. K.N. Dikshit が就任されており、基本的な問題についてはラオ長官、具体的な問題についてはデクシット局長と協議を行ってきた。

数度にわたる交渉のなかで A.S.I. との合意点は日印共同学術調査（The Japan-India Joint Achaeological Survey of Kansai University—Exploratory Survey of Buddhist Sites in South Bihar and Excavation at One Selected Site at Saheth Mahet also Known as Sravasti, Dictt. Bahraich, U.P. by the A.S.I. and the Kansai University—）として実施することになった。この協議に基づいて1985年の 8 月から 9 月、1986年の 3 月から 4 月の



舎衛城跡と伝祇園精舎跡

2回にわたってビハール州及びウッタル・プラディッシュ州の主要な仏教遺跡であるパトナ（Patna）、ブッタガヤ（ボート・ガヤー）（Bodh-Gaya）、バイシヤリー（Vaisali）、カシア（クシナガラ）（Kasia）、サルナート（Sarnath）、ナーランダー（Nalanda）、ラージャグリハ（ラジキール）（Rajgir）、サンカシア（Sankasya）、シュラヴァスティー（Srâvasti）（サヘート、マヘート）などの遺跡を踏査し、1986年4月3日、A.S.I.にて協議の結果、発掘調査地点をシュラヴァスティー（Srâvasti）のサヘート（Saheth＝Jetavana）遺跡すること、発掘調査期間は1986年10月から予備期間をふくめて3年間、毎年100日間（予定）で調査を行うことに内定し、協定書（Agreement）を作成することにした。

この協定書について1986年9月27日、関西大学大西昭男学長が署名し、10月3日ニューデリーにおいてインド国政府を代表してA.S.I Dr. N.S. Rao長官が署名され、実現することが確定した。

なお、インド国側からはDr. Sata Raman（Achaeological Survey of India Excavation Branch III）が担当されることになっている。

（III）

日印共同学術調査にともなう協定書によって決定した発掘地点であるSravastiのSahethは、わが国では祇園精舎の伝承をもつ遺跡としてつどに知られている。

『平家物語』の冒頭の一節に「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ」とあり、『今昔物語』の「代々天皇、造大安寺所々語、第十六」に「震旦ノ西明寺ハ祇園精舎ヲ移シ造レリ、本朝ノ大安寺ハ西明寺ヲ移セル也」と記している。

舎衛城（Mahet）の景観

隆安3年（A.D.399）長安を立ち、インドに求法の旅を行った法顕は（同行10人のうち智厳ら3人は高昌国から帰国、僧韶は于闐からカシミールへ赴き消息不明、宝雲ら3人はプルシャプラ（布留沙布邏＝クシャーナ朝の首都、現在のペシャワル）から帰国、慧応、慧恵は客死、道整は天竺に永住し、法顕のみ帰国した。）その記録『高僧法顕伝』（『仏国記』ともいう）に「出城南門（舎衛城）千二百歩道西。長者須達起精舎。精舎東向開門、門戸両辺有二石柱。左柱上作輪形、右柱上作牛形。精舎左右池流清浄樹林尚茂。衆萃異色。蔚然可観。即所謂祇洹精舎也」とあり、また「祇洹精舎本有七層。諸国王人民竟興供養」であったが、「鼠含燈炷焼幡。蓋遂及精舎七重都盡。諸国王人民皆大悲悩。謂梅檀像已焼」とある。さらに「祇洹精舎大院各有二門。一門東向一門北向。此園即須達長者布金銭買地処。精舎當中央。佛住此処最久。説法度人経行坐處」などとかなり詳細に記述している。

唐貞観元年（627）秋8月、都西安を出発した玄奘は河西通廊を経て高昌、ここで麴文泰の知遇を得、天竺に向い在竺13年、出発より実に19年を経て貞観19年（645）帰国した。玄奘の紀行は『大唐西域記』として伝わっている。『同書巻六』の「室羅伐悉底国」の条に「城南（舎衛城）五六里有逝多林、是給孤独園。勝軍王大臣善施為建精舎。昔為伽藍今已荒廃。東門左右各建石柱、高七十余尺。左柱鏤輪相於其端、右柱刻牛形於其上。並無憂王之所建也」とある。また「給孤独園東北有窣堵波。」……「西北有小窣堵波」とも記している。

法顕、玄奘の入天竺の記録によって5世紀の初頭から7世紀の祇園精舎の様相をある程度知ることができるが、すでにこの頃、舎衛城も祇園精舎も荒廃していたことが明確である。

漢訳の仏教経典を繙くとこの祇園精舎で説かれたものが多くある。例えば浄土教の所依の経典で

伝祇園精舎跡の景観

ある浄土三部経のうち小経を称される『佛説阿弥陀経』の冒頭に「如是我聞。一時、仏在舎衛国祇樹給孤独園」とある。この「祇樹給孤独園」の最初の「祇」と最後の「園」をとって「祇園」と呼ぶ。精舎（vihāra）は衆園、僧園であり道場、精廬、寺院の意味である。

祇園精舎で教説された経典は非常に多い。『仏説長阿含経』『過去現在因果経』『賢愚経』『金剛槃若波羅密経』『大方広仏華厳経』『大宝積経』などがある。

（Ⅳ）

伝祇園精舎の遺跡は舎衛城の城壁の南端から西南西約500mほどの地点にある。

土塁の城壁に囲まれた舎衛城（maheth）は半月形を呈し、その面積は約1 km²に及ぶ。それに対してSahethは東西約250m、南北約400m、面積約10万m²（10ha）近くある。遺跡そのものは重要歴史的文化財（Immense Historical Importance—The Ancient Monuments and Archaeological Site and Remains Act—古代の記念物及び考古学的遺跡・遺物に関する法律1958年）に指定され保護されている。

この遺跡の存在に着目したのは、初代のインド考古調査局の長官をつとめたSir. A. Cunninghamであった。彼は1863年（文久3年）にはじめて調査の手をさしのべ、続いてVogel, Marshall, Daya Ram Sahniによって1907、1908、1910、1911年（明治40、41、43、44）に発掘、独立後は1959年（昭和34）にK.K. Sinhaが行っている。この一連の調査は、Sahethの中央から北部にかけての地域であって19ヶ所の建築跡を検出した。それは僧院・寺院2、僧院2、寺院2、塔6、不明3であると集計されている。

ところが中央部から東、東南部、西、西南部が未調査となって現在に至っている。今回は特にこの地域について、まず東、東南部の地域で約1,000m²程度トレンチ（試掘溝）を設定し、必要に応じて拡大する予定である。来年度は本年の調査の進捗を判断して西、西南部を発掘する計画である。

（Ⅴ）

2年間の発掘調査でどれだけの成果が得られるかは計り知ることはできないが、調査隊は全員努力し、発掘調査を遂行したい。その第一の目的は未調査となっている部分の建築遺構を検出を通じて、出来得れば範囲を確認し、全容を明確にしたいと願っている。

インド国政府との交渉にあたってはインド国の協力、政府機関として、A.S.I.はもちろんのこと在日インド大使館、在神戸領事館、日本国外務省とりわけ文化第2課、在印日本大使館、文部省をはじめ、当初より積極的な支援を得た壷阪寺常盤勝憲住職、松沢義秋氏、調査計画全般について厳しく、温く御指導を給わった日本学士院会員、本学名誉教授である恩師末永雅雄先生、同僚として御支援をうけた史学・地理学科の諸先生、並びに大学当局、事務部局、調査費用として1億円の巨額を指定寄付下さった教育後援会の関係者に記して甚深の謝意を表するものである。

発掘調査予定地点を検討する関西大学調査隊

考古学等資料室概要

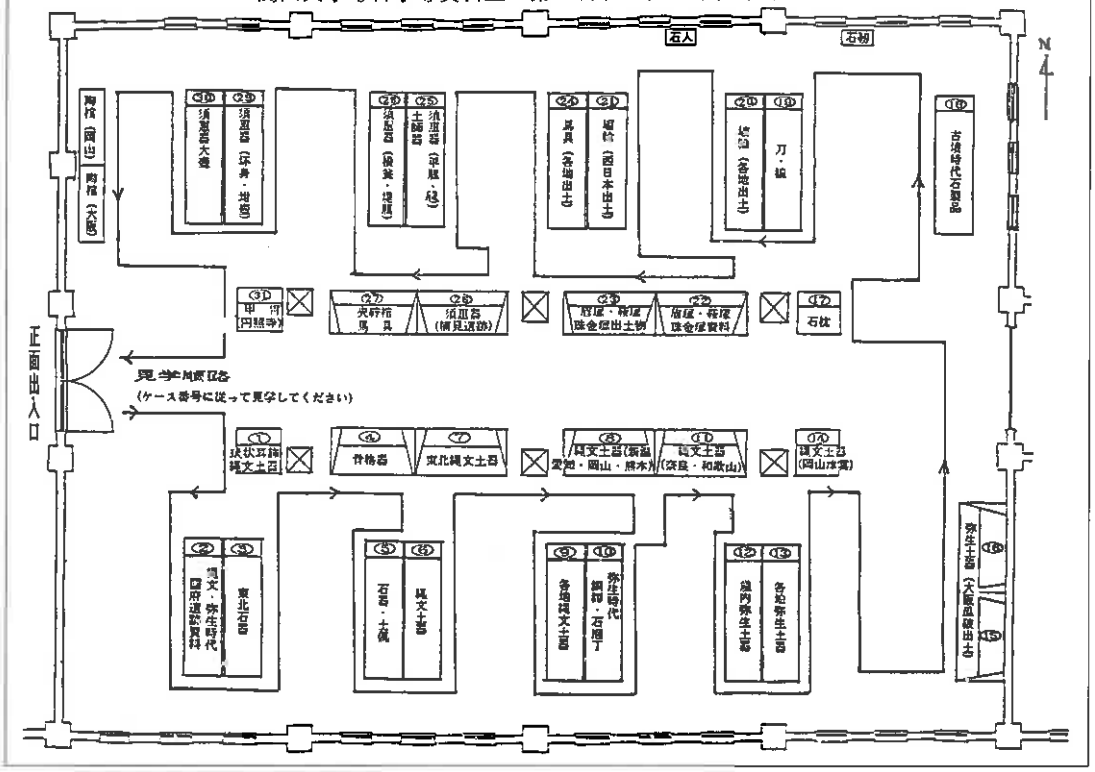
本学には多量の考古学、歴史学、民俗学等資料を所蔵している。これらの資料は明治の考古遺物の蒐集家として知られる神田孝平氏の資料を元毎日新聞社長であった本山彦一氏に継承され、これに本山氏が大阪府国府遺跡などの発掘品を加えて、堺市に富民協会農業博物館を建設され収蔵されていた。本山氏の没後本山家のご厚意と末永雅雄先生のご尽力により本学において所蔵することとなった。これらの資料は重要文化財10数点を含む学術的価値の高い資料でもある。資料は大学院学舎4階考古学等資料室へ展示していたが、このたび旧図書館（簡文館と命名）の改装を行ない展示室、事務室、研究室、実習室、収蔵庫等の独立した施設として使用することになった。使用床面積約2,000m² であり、展示面積も広がり、将来構想として博物館設立も検討されている。展示ケースも新調され、資料展示もこのたび完了したので、資料室の概要を記しておきたい。

先ず1階入口右側が考古学研究室で、研究と発掘資料の整理の部屋である。中2階が事務室、実習室、図書室等で、事務と博物館実習、考古学実習等の授業を行なっている。2階東側部分が「第一展示室」(262m²) で考古学資料約2,000点を展示している。この展示室の西側が休憩室と特別展示室であり、新収蔵資料を展示している。円型部分2階（事務室の上）が「第二展示室」(353m²) で歴史、民俗、美術資料約500点を展示している。これに附属して北側に収蔵庫（1～4階920m²）がある。

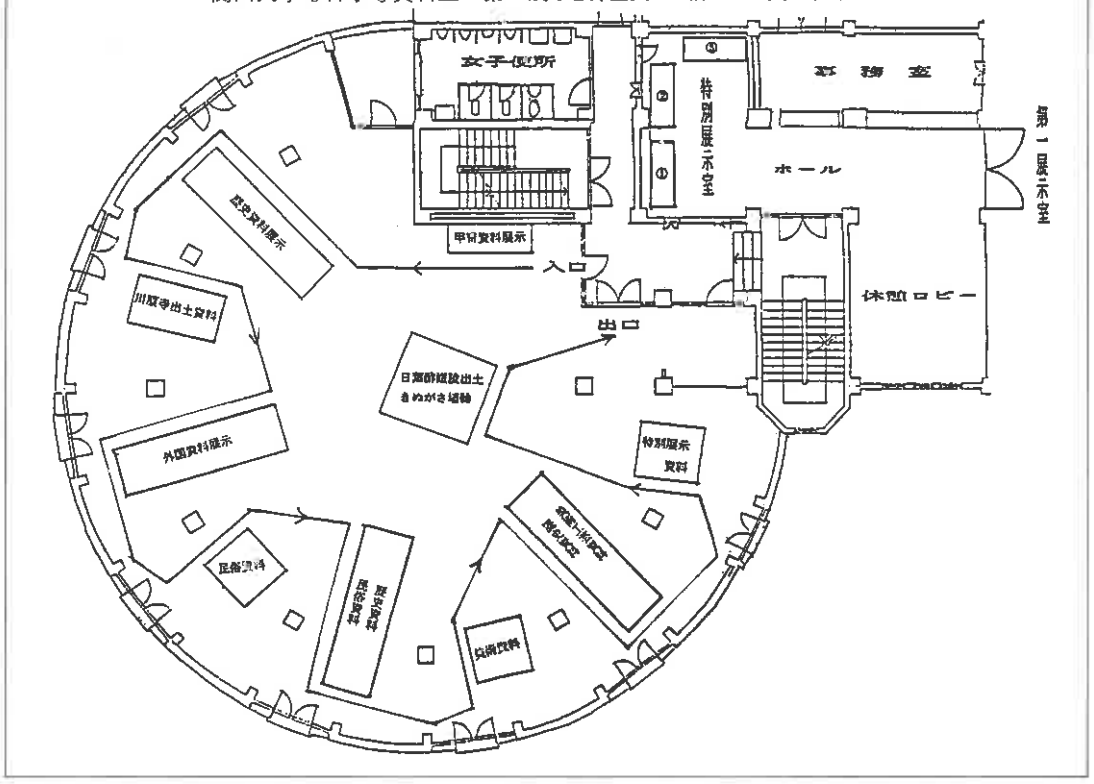
展示資料として第一展示室を入ったすぐ右2つのケースに大阪府国府遺跡出土一括資料を展示しており、玦状耳飾、ざる型、高杯型、鉢型土器などいずれも重要文化財に指定されている。また奥の一角に天理市渋谷出土の「石枕」を展示している。第二展示室には末永雅雄先生復原の甲冑資料と和同開珎一括資料等の重要遺物を展示している、これらの資料を活用し、関連する科目の授業を行ない教育効果を一層高めている。

展示ケース及び展示の一例

関西大学考古学等資料室　第一展示室（考古資料）（262㎡）



関西大学考古学等資料室　第二展示室（歴史・民俗・美術資料）（353㎡）



◎寄贈資料

愛知県在住の校友松廣寿衛氏（昭３専商）より縄文土器、韓式土器、高麗青磁、瓶子等32点の寄贈を受けた。ここに感謝申し上げます。これらの資料は特別展示室に展示しており、現在整理中で、紀要へ収録の予定である。

縄文土器（松廣寿衛氏寄贈）

◎資料利用状況

昭和61・９

縄文土器６点、土偶３点
土版　　２点、土面２点
青龍刀石１点、石棒１点
青森県郷土館「亀ヶ岡文化展」へ

昭和61・６

鉢形縄文土器（大阪府藤井寺市国府遺跡出土）１点
朝日百科『日本の歴史１』36号へ掲載。

編集後記

本学創立100周年記念式典が11月２日大阪城ホールで開催された。内外の関係者約13,000人が参列され、100年の歴史を讃えて厳粛・荘重にも盛大に行なわれた。そして21世紀の「世界の大学」として誇れるよう努めるべく力強く踏み出した。考古学資料室もこの記念すべき時期に完成できたことは慶ばしいことである。今後は諸先生方のご意見・ご指導を得、内容の充実をはかっていきたいと考えています。

横田健一先生にはご多用にもかかわらず、貴重な玉稿を長文にわたり執筆していただいた。また、網干善教先生には本学創立100周年記念事典の一環としてインド国との学術共同調査を行なうこととなった「伝祇園精舎」について執筆していただいた。ここに両先生にお礼申し上げます。

表紙の写真は昭和60年３月まで図書館として使用されていたものである。総合図書館の建設により考古学等資料室として改装されて、10ページの概要の如く利用することになったものである。この建物は昭和30年建築され、著名な建築家村野藤吾氏の設計である。〔角田芳昭〕

関西大学考古学等資料室彙報　No.14　昭和61年11月１日　発行
関西大学考古学等資料室　編集
原多印刷株式会社　印刷